（最優秀おはなしエンジェル賞　中学生の部）

文明再建

中二・唐木　創平

〃２０ＸＸ年、この地球では温暖化が進んだことで、空気は淀み、平均気温も昔と比べ大幅に上昇していた。人々はそんな異常気象に耐えられるはずもなく地球全体の人口も減少傾向へと移り変わっていた。そんな中、とある研究所ではこの異常気象に終止符を打つべく、ある装置の開発を進めていた。その装置とは、タイムマシーンである。このタイムマシーンを使って過去に戻り、当時の人々にも温暖化に対して危機感を持って対応してもらう。これがこの研究の狙いであり、研究員たちはこの研究に躍起になっていた。そして、とうとうタイムマシーンが完成。研究員たちは大いに喜び、次にタイムマシーンに乗るパイロット探しを始めた。タイムマシーンの都合上パイロットは１人しか乗れないため、タイムマシーンに乗れるだけの経歴や周りからの信頼のある人材を見つけるため、タイムマシーンづくりと同じぐらいの熱量でパイロットを探しはじめた。しかし、そう簡単にそんな人は見つかるわけもなく、タイムマシーンの完成から３ヶ月がたとうとしていた。そこで意を決して立候補した男がいた。その男とは研究所で働く研究員であった。男にはこれといった経歴はないものの周りの人たちからの信頼は厚く、人一倍責任感は強かった。だが、このタイムマシーンにはやや懸念点があり、それはタイムマシーンが途中で壊れてしまうかもしれない点であった。男はこの問題をわかった上でパイロットになることを決意し、様々な想定の訓練を受け、心身ともに鍛え上げていった。そう

して、タイムマシーンを使ったタイムスリップ当日。この男の前には、大勢の群衆が集まっていた。当然このタイムマシーンの件は世界中に報道されていたのだ。世界各地の人々や首脳たちの期待や希望を胸に男は、タイムマシーンに乗り、眼の前のおびただしい数のボタンとレバーを器用に動かし、「５０年前」と書かれたダイヤルに合わせた。そして大勢の群衆を前に一礼をして男はタイムマシーンとともに消えたのだった。

男が目を覚ますとタイムマシーンはどこかの空き地のような場所に降り立っていた。どうやら５０年前のこの場所は空き地だったようだ。さっそく男は周辺に人がいないか探し始めた。そこから３０分ほど歩くと市街地が見えてきたので男は人々に自分の身元や自分が未来から来たことを話して説得しようと試みた。しかし、男の話を信じるものなどおらず男は人々に馬鹿にされたり罵倒された。それでも男は諦めなかった。なぜなら、そういった想定の準備はもとからしてあり、男は政府に認定された書類や証拠となる写真を持ってきていたのだ。そのため、意外と物事は順調に進み、その後とうとう政府にものを言えるまでの立場にまで上り詰めた。しかし、最後の最後で男の言う事はなかなか聞いてもらえず、結局男はこの時代を諦めて、もっと昔の時代へと旅立つのだった。そうして次に男はダイヤルを「１００年前」に合わせてタイムマシーンに乗り込んだ。ところが、どの時代へ行っても自分の言うことはまともに聞いてもらえない。とうとう嫌気が差した男は、一旦、もとの時代に戻ろうとダイヤルを戻した。ところがタイムマシーンはうまく反応してくれない。それどころかタイムマシーンは暴れ始め、制御が効かなくなってしまっていた。男は、そのまま気を失い、目が覚めると、自分がジャングルにいることに気付いた。

慌ててタイムマシーンのメーターを確認すると驚くべきことにメーターの値は「1億年前」と書かれていた。男は最初、自分の目がおかしいのかと思ったが、何回確認しても1億年前に変わりなかった。男は、子供の頃に読んだ恐竜図鑑のことを思い出し、今自分が白亜紀の時代にいるということに気付いた。ここで焦っても仕方ないと思った男は冷静に自分の置かれた状況を整理しようとしたが、やはりそう簡単にはいかなかった。心臓はバクバクなっていて今にもはち切れそうな勢いだ。男はなんとかタイムマシーンを直してもとの時代に戻ろうと試したが、どこがどう故障しているのか検討もつかない。(このまま自分は死んでしまうのだろうか)男はそう思った。すると、ジャングルの奥の方からこちらに向かってくる大きな影が見えてきた。男にはその大きな影が何なのかすぐにわかった。それはかの有名なあの「ティラノサウルス」だったのだ。男には大声で叫ぶ気力も残っていなかったので、ただその大きな巨体を見つめるしかなく、男は自分がこのままティラノサウルスに食われて死んでしまうのだと思った。しかし、意外にもティラノサウルスは男に興味を示すことはなく、タイムマシーンの方が気になっているようだった。男はタイムマシーンを壊されたら二度ともとの時代に戻れなくなると思ったから、なんとかティラノサウルスを撃退しようと自分が持っていたものをがむしゃらに投げつけた。そうすると男のポケットに入っていた小型翻訳機がティラノサウルスの体に当たったのだ。この翻訳機というのは元々、男の言語が通じなかったときのために開発された道具なのだが、なんとその効果は人間だけにとどまらなかったようだ。ティラノサウルスは流暢な言葉遣いで話し始めた。

「私はティラノサウルスですが、あなたを食べようなんて決して思

っていません。ただそこにある鉄の塊のようなものが何なのか知りたいだけなのです。」

そう言うとティラノサウルスは男に立て続けに質問し始めた。男はこの状況に理解が追いつかず最初はポカーンとただ口を開けているばかりであったが、もし自分が質問に答えなければ、ティラノサウルスの機嫌を損ねてしまうと思い、今までの自分の経験してきたことと未来の地球の有様を素直に語った。すると、ティラノサウルスは何を思ったか、突然仲間を呼び始めた。すぐに２、３頭が集まり、どうやらなにかを話し始めた。その姿は、図鑑の中のティラノサウルスとは全く違う、とても知性のある姿に見えた。そして、話し合いが終わるとティラノサウルスは自分についてくるように言った。男はその指示に従い、大人しく彼らについていった。１０分ほど歩くと開けた土地が出てきて、男は目の前の光景にとても驚愕した。それは、様々な恐竜たちが共存し暮らしているような、いわゆる「村」のようなものだったのだ。草食恐竜、肉食恐竜は関係なく仲良く暮らし、農業や商業を営むその姿は、図鑑で見た恐竜の姿とはかけ離れたものであった。自分のためでなく、他の者のために働く、そんな姿勢に男はとても驚かされたと同時に尊敬の念まで感じた。そして、人類とこの恐竜たちを比較して、人間の傲慢さや自己中心的な社会に恥ずかしさをも感じたのだ。そして、男は人類よりもこの恐竜たちがこのまま繁栄し続けたほうが良いのではないかという考えに至り、男はこの村の恐竜たちに、これから何千万年かあとに隕石が地球に落ちて恐竜は絶滅してしまうということを伝えたのだった。そうして男は彼の生涯が尽きるまでこの村で暮らし続けるのであった。さらに、この話には続きがあり「本当に変えるべきだったのは人間の心であった」という言葉を残し男は息を引き取った

という。〃

「ふむふむ、そういうことだったのか、それにしても『人間』はすごいな。しかし、最後の言葉の意味はどういうことなのだろうか？」

「ねぇねぇパパ、この化石はなんの生き物の化石なの？」

「えっと、ああ～、この化石が『人間』という生き物の化石なんだよ。大昔に僕らの先祖が滅んでしまうという予言を残し、その予言のお陰で僕たち恐竜は隕石による絶滅を免れたんだよ。だから坊やも人間には感謝しないといけないよ。」

「そうなんだパパ、教えてくれてありがとう！」

そんな会話をし、博物館を訪れる恐竜親子の住む地球はとてもきれいであり、今日も平和な一日が続くのであろう。

画：死後くん